時論

ブランドは社会への約束

努力の継続が信用に

田中　優子

たなか・ゆうこ氏
1952年横浜市生まれ。法政大大学院修了。専攻は近世文学、アジア比較文化。著書に「江戸の想像力」「自由という広場」など。2005年紫綬褒章。

大学の看板となる研究の費用を国が助成する「私立大学研究ブランディング事業」という制度がある。私立大は今、少子化の中で個性を強く打ち出すことを求められており、この制度もその一環に位置付けられている。

法政大は「江戸東京研究の先端的・学際的拠点研究」で2017年度の助成対象に選ばれ、「江戸東京研究センター」を設立した。江戸文化研究と工学系の「水都」研究の長年の蓄積を組み合わせ、循環と文化創造を可能とする、これからの都市のための新たな研究体制を提案したのである。

私自身が1980年代から江戸文化研究の著書を出し続け、学内の国際日本学研究所などを拠点に一層の展開を図ってきた。並行して陣内秀信名誉教授もまた、イタリアのベネチアと東京を「水都」の観点から見直し、エコ地域デザイン研究センターを率いてきた。どちらも約30年の研究と教育の蓄積があり、次世代の研究者も育ってきた。

▽発掘と貢献

ブランドとは何か。法政大では「社会への約束」と定義している。ブランドは単なる知名度ではなく、広く認知された個性であり、社会の信用そのものだと考える。どのような企業も大学も、それまでの業績の中に宝物がある。働いている人々や成果の中に必ず輝くものがある。それを掘り起こし、つなげ、言葉を与えて目に見えるようにする。それがブランディングという作業である。

2年前制定した「法政大学憲章」が社会に約束しているのは、「自由を生き抜く実践知」の創出である。そして教職員や学生は、「実践知とは何か」を考え、自らの能力を引き出す作業に入っている。ブランドとはそのように、個人と組織がいかにして社会に貢献できるかを探り、約束を果たすために能力を開発し続ける努力を意味する。

個性的で質の高い能力を掘り起こし、理想に向けて努力することは、個人にも、企業や国家にも可能な作業である。他と比較せず、勝敗を基準としない。必要なのは長期間にわたる信用である。商業を発達させ大きな経済成長を遂げていた江戸時代の日本では、何よりも信用を大切にした。目先の利益のための粉飾や捏造や不正や暴挙は、ブランドを崩壊させる。

日本という国家のブランドもまた、ものづくりの質や、人々の公正さ、自然環境や文化の美しさへの世界の信頼を高めることが要であろう。軍事力で信頼を得ることはできない。私たちはそれを他国の例で知っている。

▽瞬時に瓦解

先日、東京医科大を「研究ブランディング事業」の助成対象にするよう便宜を図る謝礼として、入試で息子を合格させてもらったとする受託収賄の疑いで、文部科学省の前局長が逮捕された。息子の答案を採点時に大学側が不正に加点したとされ、大学の理事長や学長の関与も疑われている。

前局長は「よろしくとは言ったかもしれないが、加点は頼んでいない」と話しているようだが、依頼でなく「忖度への誘導」だったとしても、日本の官僚もここまで落ちたか、とため息が出る。一方で、大学関係者としては、なぜそんなことが可能なのか、首を傾げざるを得ない。

法政大では、入試の答案はランダムに打たれた番号を基に採点される。採点者も、それを扱う事務職員も、理事や総長も、受験者が誰かは分からない仕組みになっている。今どきの大学入試において、恣意的な加点ができること自体が驚きだ。

東京医科大の公開情報によると、収支とも年に約140億円の規模で大学が動いている。それに対して研究ブランディング事業の助成は、年に2千万～3千万円。大学全体の財政の中では「わずか」といえる助成金のために、なぜ大学の信用を失墜させるようなことをしたのか。不思議だ。

加えてこの事件は、多くの大学の教員や研究者が大所高所から審査しているはずの助成金の行き先に、1人の文科省職員が手を突っ込んで左右することができるのではないか、という疑念をもたらしてしまった。審査の公正さに対する信頼も、大きく揺らいでいる。

目先の利益と勝利を得るための愚行が、長い間の努力の結晶であるブランドを瞬時に瓦解させてしまう。誰もが肝に銘じるべきだろう。

（法政大総長）